**おたる船上山植樹祭**

2013.7国土緑化機構　助成

**いのちの森　植樹祭**

　1．鎮守の森つくり

　2009年に始まった小樽住吉神社の船上山の植樹祭は今年で最終年度を迎えた。毎年植樹をした苗木が子どもの成長のように伸びていて、植樹をした汗の結晶が木々の高さとなって楽しませてくれる。そして自分たちが植えた苗木が風雪に耐えて成長している姿に嬉しさと同時に命の鼓動を感じさせてくれる。

　かつて船上山に神社を創建した時は、高い丘の上に神殿が建っていたのであろう。今老木となって切り倒された木々だって、鎮守の森を造ろうと植樹をした人たちの努力があったに違いない。

　私は神とは「自然の神秘さ」であり、「自然の恵み」であると思っている。それだけに自然の森に囲まれてこそ、両手を合わせて神様を信じる気持ちになれるのだ。

住吉神社の鎮守の森は、年々苗木を植えるマウンドが山の頂上へと移って行って、今年はとうとう船上山の頂上にマウンドができていた。今年の植樹で船上山に鎮守の森が完全に再生されるのだ。

長い間鎮守の森は神殿を囲み、小樽市民の安全と港小樽の航海の安全を守って来てくださっていたが、これからは地球の命を守る『命の森』として、未来の子どもたちの命を守る森になってくれるのだ。

２．7月11日　植樹の準備

今日から船上山の植樹の準備が始まる。神社の境内に行ってみると、神殿のはるか上にマウンドが造られている。とうとう山の頂上までいったのかと思わず感嘆の声が上がる。

　荒木副理事長の創建社の皆さんが汗水流して造ってくれたマウンドなのだ。頂上を見上げると急な斜面に階段が造られている。なぜか優しさを感じる。

　この一週間雨模様だった天気予報が見事に晴れマークに変わって、暑い日差しの中での作業となるようだ。マウンドを造った人たちはやぶ蚊に悩まされていたようだ。

　この日の作業は藁運びと苗木運びだった。軽トラックで何度も往復しながら、トラックに積んでは車から下す作業になる。急斜面へ運ぶのだから簡単な作業ではない。この日は青年会議所の若手の労力が力を発揮する。

　宮脇方式の植樹は、この藁が大事な働きをする。苗木が成長するのを守ってくれるのだ。

藁が無かったら、雨水で土砂が流れ、苗木も流されるのだ。更に藁に湿って水分が苗木の成長を促してくれる。

　苗木が植えられ、藁が敷かれ、その藁を押える縄つくりも大事な仕事となる。今年の縄はすでにマウンドの幅を創建社でやってくれていたので、あとは杭にしばれるように縄を作っていくことだ。退職校長の荻山先生が孤軍奮闘して縄が作られていった。

　毎年政すしの「たけさん」こと竹内さんが応援に駆け付けてくれる。マグロを解体させたら右に出る人がいないほどの達人だ。太い腕と体力が仕事をはかどらせてくれる。「たけさん」は実に気風がいい人だ。同じ仕事をやっていても気持ちを快適にしてくれる。

　作業は順調に進み第一日目は無事予定通り終わった。

　7月12日　準備二日目

　今日から青年会議所の皆さんが北見の大会に行ってしまったので、人数が半減した。しかし、千年の森の貴重な会員の蘭越の渡辺さんや、ニセコの横山さんや井形さんご夫婦がやって来てくれた。午前中の作業は縄を杭に縛り、苗の種分け、そしてマウンドまで運んだ。マウンドには石が多く混じっている。苗を植えやすくするために石を拾っては投げ捨てる。昨年まで植えたマウンドの雑草が生い茂ってきているので、雑草取りが始まる。これはニセコの横山さんが最後までやってくれていた。

　午後からはまた石拾いを続ける。雑草取りも続けられる。午前中に植えた桜の木五本を

植える。少ない人数であったが、ベテラン揃いのせいか作業は順調に進んだ。

　7月13日(土)　最終の準備

　この日は島牧の杉山先生も加わっての作業となった。昨日植えた桜を植え替えた。水槽に水を張り最終点検を終えた。明日の植樹本番に向けての下準備を無事終えた。

　この日の夜は意見交換会を政寿司で行った。

　今年の意見交換会は宮脇先生のご尊顔を見ることができず、中村理事長初め市川さんや荒木さんが知人の息子さんの結婚式に出席のため欠席となり寂しい思いで出席をしたが、実に和気あいあいの楽しい意見交換会となった。

それは今年の「北海道千年の森」の総会の際に講演して下さった藤原先生が出席してくださったからだった。それに今年もまじえる会の皆さんが元気な顔を見せて下さったからでもあった。

　出席者は毎日新聞社の北海道支社山科報道部長さんに山本さん、それにグリーンワールドの畑さん、青年会議所からは代表で小間さん、千年の森会員の田中さんに司会進行の熊沢先生と熊沢歯科の00先生、それに山川理事長だった。

　大学の教授というと近づきがたい印象を持つものであるが、藤原先生は終始笑顔で、教養とお人柄が親しみを感じさせ、毎年小樽においでになっているような感じで談笑されていた。

　7月12日付の毎日新聞が配られた。なんと中を開くとページ一面に「北海道千年の森プロジエクト」の活動が特集記事となっていた。新聞記事を読んでさすが山本さんだと新聞記者の確かな眼と文章力に感動した。

　意見交換会は自己紹介といっても、懐かしい人ばかりで、まるで同窓会のような雰囲気で盛り上がっていった。小樽に初めて参加されたまじえる会の０００さんもきっとこの小樽の雰囲気が好きになってくれると思った。

　それにしてもまじえる会の代表の谷さん初め高木さん・田村さん・鈴木さん・室崎さんと本当によく小樽に来て下さると感謝の気持ちでいっぱいだった。

　藤原先生と谷さんのやや専門的な植樹の話を聞きながら、木が育っていく土壌に生え茂っていく木の根が混色することで、ミズナラの真っ直ぐ伸びる根が他の木と微妙に絡み合競争し合いって丈夫な根ができることなどを知り、改めて木の根が木の生命力を支えているのだと感じたのだった。

　藤原先生と熊沢歯科の00先生がパソコンで明日の講演の打ち合わせを聞いて、明日の講演が楽しみになってきた。午後7時に始まった意見交換会も市川さん達が二次会の会場で

待っているとのことで、美味しい政寿司さんのご馳走と中村社長の差し入れのウニのお寿司を頂いて、明日の植樹祭の成功を祈念して田中さんの発声で三三七拍子の手拍子も高らかに意見交換会が閉じられたのであった。

　7月14日（日）船上山植樹祭

　朝9時リーダー講習会が船上山で行われた。この日は住吉神社の宵宮祭なので、神社の扉が開かれて、植樹祭の成功を神様が見守ってくれるような感じだった。

　神社の拝殿から見上げる植樹のマウンドは、山の頂上にあって、急坂な所もあり、老体の身には結構きつい作業になりそうだ。

　植樹祭でのリーダーの役割は重要だ。リーダーの指導によって作業が順調に完全に成功するのだ。いつもは宮脇先生の厳しいリーダー研修会で緊張する場面も多かった。藤原先生は笑顔を絶やさないで指導して下さったが、さすが学問の道を究めた先生なので、指導の内容は的確で厳しいものだった。

　自然の森を造るためには、木の命を大切にして植樹をしなければならない。植樹をする精神的な心構えは、全く宮脇先生と同じだった。そして宮脇方式に藤原先生の考えを加味しながらのリーダー研修会となった。

　急斜面のマウンドは苗木を植える穴を掘るのにも注意が必要だ。ポット苗の持ち方から

穴の掘り方、一平方メートルの土地に3本の苗木が植樹されるのだが、ミズナラを中心に

潜在広葉樹21種類の苗木を三角形に植えていく。全部植え終わったら時点で、低木を適宜空いている場所に植える。ここがこれまでと違って、これまでは低木をマウンドの周りを取り囲んで植えていたのだった。

　藤原先生の指導も終わって、リーダーが植樹をする。さすがリーダーだけあって、完璧に植樹を済ませることができた。

　藤原先生の講演会場は政寿司さんの「かもめ亭」だ。講演会場には大勢の人が集まっていた。「地球の命を守ろう」「未来の子どもたちのために」と志を持って参加した人たちだ。今日はまた藤原先生の講演が楽しみでやってきた人も多い。

　中村理事長の「地球の命を守りましょう」という挨拶の後、藤原先生のご紹介があって、講演が始まった。スクーリンを使っての講演だ。まるで大学の講義を受けるような気持ちになってくる。

　藤原先生は宮脇先生の門下で，師の理論を継承し、みどりの自然の保全、回復に精力的に取り組み、小樽に来る前はヨーロッパで講義をされていたようだ。

　まずは植物の生態学を短い時間でわかりやすく資料をスクーリンに映し出しての講義だった。植物の生態は環境に大きく影響を受けているかがよくわかる。先生の講義を聞きながら、ふと動物の生態も植物と同じだと思った。それはラッコの皮をほしくて乱獲したら、ラッコの食べるアワビが増えて、そのためアワビが海草を食べつくして、アワビが激減し、そのためにラッコの生命も維持できなくなる話だ。

　自然界とは本当に巧妙にできていることが、生態学の研究で科学的に証明されてきたことなどもよくわかる講義だった。一番関心をもったのは、東日本大震災の際の生々しい植物の生態の現状だった。藤原先生も震災後東北に行って、学者の眼から見た津波の現状を

調査して、あの大津波のエネルギーに影響を受けた木々の実態を詳細に記録し分析した結果を教えて下さった。大津波に無残にも倒れていく木。その中で生き残っている木。それはなぜなのか。植物の生態学からの研究が、これからの東北再生の大きな力になっていくと思った。

　藤原先生の講演が終わって、植樹に参加した人たちへ政寿司さんから特大のおにぎりが配られた。このおにぎりは参加者が楽しみの一つだ。おにぎりは大きくて中に「イクラ」と「シャケ」の入っている。ペットボトルのお茶を飲みながら、しばし昼食の時間となる。

　昼食が終わっていよいよ住吉神社の植樹の会場「船上山」へと向かう。この日は神社の宵宮祭の日だ。神社の境内には露店が立ち並び、子ども達で賑わっている。参詣の人たちもやってきて、いつもと違う雰囲気の中での植樹祭になった。

　まずリーダーが番号の書いた表示のプラカードを持って整列し、そこへ受付でもらった番号札を持って参加者が整列する。今年は住吉神社の星野宮司さんが、一人千円のチケットをプレゼントして下さる。鎮守の森を造ってもらうお礼だという。これで植樹の後の楽しみが増える。

　三ツ山病院の内科医の中井先生の司会で開会式が始まる。中村理事長の晴れやかな明るい挨拶に続いて、来賓の方々の紹介、そして来賓の代表者の挨拶が続く。そして藤原先生が紹介され、先生から植樹の順序と心得の指導を受ける。

　参加者は正に老若男女で130名の中に潮見台小学校の子どもたちがまじっているのが嬉しいことだ。藤原先生は宮脇先生流にこれから植える木々の名前を教えて下さる。

来賓がまず指名され、木の名前は三度叫んで参加者も同調して三度唱える。初め小さかった声も子どもたちの大きな声で弾みがついて大きく境内にこだまする。

開会式が終わって、いよいよ植樹会場へ出発だ。参加者の中には高齢者も多い。転んだりして怪我をしないかが心配だ。それは本当に急な斜面を登っていくからだ。好天が続いて、今日も暑い日差しが降り注ぐ。しかし、植樹をしに来た人たちだ。みんな元気に上って行く。山の頂上のマウンドまで、これまで植樹した苗木の生長を見ることができる。マウンドに立てられたプラカードに自分の名前を見つけた人の笑顔が見える。毎年植樹した木々の生長が木の高さになって迎えてくれる。

今年は00班編成だ。それぞれのマウンドに着いて、さっそくリーダーの指導で植樹が始まる。マウンドに立ち並んでポット苗が手渡しされる。シャベルで二倍の穴が掘り起こされ、ポットから苗がそっと取り出され、まずはミズナラの苗が植えられる。次にシャベル二倍の距離で三角形になるように、別な種類の苗が植えられる。どこのマウンドを見ても

真剣に苗木を植える人の姿が見えて、晴れ晴れとした気分にさせられる。

　「その苗取って」「これは同じ木だよ」「そこそこ、そこに植えて」とお互いに声を掛け合って植樹の作業が順調に進んでいく。高齢者は無理をしないで自分のペースで植えている。藤原先生が苗を植える時、「苗の周りの土をそっと押さえて植えて下さい」と言った言葉が浮かんでくる。何も急ぐことはない。「丁寧に優しく願いを込めて植えるのだ」と心に言い聞かせて植樹をする。

　親子で植樹をしている家族がいる。三人の男の子の兄さんを先頭にお母さんと一緒に木を植えている。その姿を見て素晴らしいと思う。「地球の命を守るのです。子どもたちの未来のために」という中村理事長の言葉も浮かんでくる。

　毎年植樹をしているベテランの活躍も素晴らしい。植樹はどの班も順序良く順調に進んでいる。苗木が程よい間隔で植えられて、今度は藁が敷かれていく。これも手渡しで、マウンドの上から苗木の間に敷き詰められていく。「そこそこ、そこが隙間になっているよ」と下から見ている人が叫ぶ。この藁が宮脇方式に最大の特徴でみある。しっかりと苗木の周りに敷かれた藁は、風や雨にあっても苗木を守り、木の根が根付くのに大事な働きをするのだ。

　次に藁が飛ばないように縄が張られる。マウンドの杭に縄がしっかりと固定されていく。

どの班も見事な仕事ぶりだ。「北海道千年の森プリジエクト」のこれまでの成果が作業の仕上がりで証明されていくようだ。

　最後にマウンドの苗木に水がかけられる。それを見ながら今年の植樹で船上山の鎮守の森の植樹が終わるのだと思うと同時に、やがてこの苗が大きく成長し、住吉神社の社殿を守り、地球の命を守る大木として育っていってくれることを祈願するのだった。

　植樹を共にした思い出として、立札に名前を記入して記念とした。そして写真を写した。「千年の森―」と叫ぶと笑顔になる。誰もが満足感にあふれた笑顔だった。今年は宵宮祭でもあって、閉会式は行わずに流れ解散となった。そして星野宮司さんからいただいたチケットを片手に露店が立ちならぶ境内と散って行った。